

〈3月例会報告〉

偲ぶ会は9月18日(日)に決定

庄司先生が亡くなられてはや1年がたちました。先生の肉声を聞くともまだどこかにおられるのではないかと錯覚をしてしまいます。さて、追悼文集の編集は佳境に入り、先生を偲ぶ会の準備会も初会合が行われました。今後の飛躍のためにもぜひ成功させたいと思っただけです。

参加者：小田、向井、篠原、尾崎、伊東、徳永

言葉遊び指南

言葉の魔術師

向井吉人

向井さんが『言葉遊び指南 さいろく&余録・備忘録 言葉遊び・ラボ '15』(自家版)を出した。昨年度の立川市立西砂小学校での言葉遊びの記録である。全64ページは、並の力ではできない。

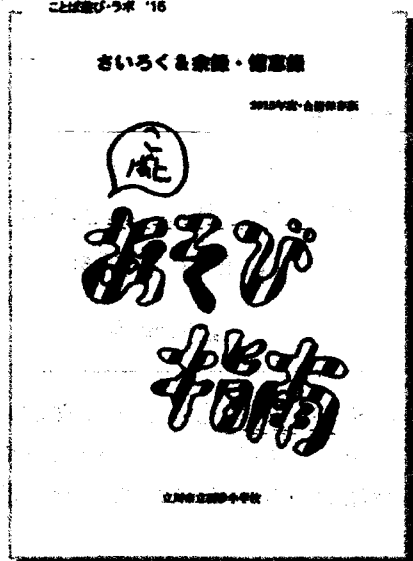
向井さんの言葉遊び授業で感じるのは、言葉を通して子供たちが主体的になっていくことだ。どうしても受け身にならざるを得ない一般に授業に比して言葉遊びは参加者すべての脳が全開する。言葉遊びでは、例題を提示してそこからはどう転がっていくかわからないジェットコースターのようなスリルもある。

本文中にある舞台中でのしりとり。しりとりを始めて、「かすみ→みかん」ときたところ、「みかんじゃ終わっちゃうジャン」の声、そこで向井さんは、「みかん→

かんじ」とつなげていく2音しりとりもあるよ、とさりりと次の段階に進めるあたりは言葉の魔術師の感がある。

向井さんの昨年の肩書きは、「マイスター支援員」。この支援は、生徒にも現場の教師にも向けられている。退職して3年の私の周りを見ると向井さんのようなスーパー教師

はいない。60を過ぎてもう「余生」と考えたり、クールダウンのように時間を過ごす諸氏が多い。しかし向井さんの感性



や子供とのやりとりを読んでいくと、いまでも現役なんだなあとつくづく感心してしまう。

私事だが、私も退職して塾を始めて4年目に入る。現在小・中の生徒20数人を抱え、ある意味で学校教育の現場よりも質の高い指導を目指している。

しかしこの業界では経営が生半可ではかんたんに淘汰されてしまう社会でもある。だから、何を優先するべきかを常に考える。認識論的にいえば物事の本質を探り当てる欲求がなければできないと思うのだ。

向井さんの実践は私の塾でも一部導入させてもらっているが、学校教育を超えて広く言葉を自分のものにするためのスキルとなっている。

空虚で抽象的な言葉や認識が飛び交うことの多い授業空間の中で、言葉遊びの子供たちの編み出す言葉のなんと主体的なことか。

あとがきにもあるが、言葉遊びの一つの目的が自分の中に無意識に蓄積されている言葉を探り出すことだと向井さんは言う。その試みこそ、庄司認識論と見事にクロスしていくことがわかる。

入選懸賞論文

小学生と障がい者との交流にみる「障がい者に対する認識の深まり」に関する研究

篠原賢明

本稿の試みは他者とどう理解し合えるのか。コミュニケーション能力を育てるための端緒として忘れてはならない問題提起である。

この課題を篠原さんは、障がいのある人

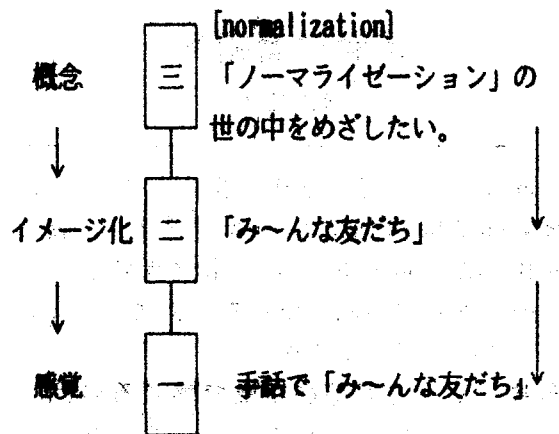
たちとの関わりの中で試みたのが本実践である。

学区内(長野市)にある障害者支援施設「アトリエ coco」に子供たちと出かけ、どのように障がい者を正しく理解し、認識を深めていけばいいのか」という問題意識を持って足かけ6年(小5・6、小1・2、小1・2)に及ぶ実践が紹介された。

障がい者に対する距離感はさまざまだが篠原さんの試みのねらいはその距離感を何とか狭めたいとの思いだ。

もちろん障がいのある人々との交流が不可欠で互いに理解し合えばその距離も縮まるはずである。しかし私の経験からいっても一歩間違えると上から目線になったり、共感に至らなかつたりその関係作りは思うほど容易ではない。

篠原さんは庄司認識論を丁寧になぞりながら子供たちの表層認識を深めていく。



【認識が上り下りして発展(深まり)する模式図】

上の認識模式図は、アトリエ coco の施設長の綿貫さんの話にヒントを得てつくられたものだが、ノーマライゼーション(健常者と同じように生きる社会)をめざすという大きな目標が子供たちにそれなりに伝わったことが何よりも大きい。つまり彼らは意識的に概念化を深める試みに挑戦した

わけなのだ。

そこで子供たちが見たものは、障がいがある人たちが真剣に働き生きる姿だった。そういう真剣さこそが、子供たちが次第に忘れかけていく大切なものだということを再認識する機会となったといえる。

篠原さんは結果から三大連関理論につなげていったのではなく、子供たちの認識を「感じる」→「思う」→「考える」という段階にまで昇華して高めていったことに本稿の価値があると感じた。

ここで紹介された6年にも及ぶ地道な試みは、障がいのある人々の交流というありがちな教育行事を超えたところに意味があるように感じた。

それは、物事を深めるというプロセスを示しただけでなく問題をどのように解決していくかという手順にも言及し、彼なりの試行錯誤が様々な点から読み取れるからである。

とくに「障がい者は何をするか分からない…」といてクレームをつけ子供を休ませた親が、次第に軟化していったのは、教室の子供たちの中に温かい思いが浸透して、やらせられているという行為ではないんだという共感にも似た思いが深まっていたからだと思う。

本稿は篠原さんが、ある教育財団に送った懸賞論文(しかも受賞作)を土台にしているということであった。篠原さんの多様な試みに拍手を送りたい。

小学二年生の「心づかい」と 「ハラの言葉」の養分

尾崎光弘

庄司先生が半生を語った最後の講義ともいえる談話録(全4回未完)の中で2014年10月に行われた内容を元にした原稿が本

稿である。

私自身がこの時、成城学園の小学校低学年の子供の中から何を学び取るかを「イモリと子供の間」(2015, 1)という原稿にして庄司先生に読んでもらい、それなりの評価を得たのだが、それが最後となってしまっていた。

庄司講義録を詳細にテープ起こしした尾崎さんはさらに内容に踏み込んで、持論である「ハラの言葉」とつなぎ合わせて展開した。

一見視野が狭くて自分という立場からしかものが見えていないと思われる子供たちの発言や動きをよーく観察すると、子供たちは決して自分の視座からの発言だけではなく、他者(この場合は動物)の側に立ってみることができるという発見を庄司先生は、『小学生の自然観と予想授業 理科の授業改造』(庄司和晃 明治図書)の中で書いている。

子供たちは対象に対して「こちら中心主義」(自分からの視点)と「あちら中心主義」(対象からの視点)を行ったり来たりすることで対象との関係作りの経験を深めて行くことがわかる。庄司先生は、これを「もとで」と名付けているがこのような蓄積がやがて認識の肥やしとなっていくのは当然であろう。

尾崎さんはこの「もとで」をあえて「ハラの言葉」(自分の気持ちにびったりの言葉)としてとらえようとしている。対象に寄り添うことで「心づかい」が生まれるのだが、親から受けた愛情をそのまま対象に分与する姿勢は、子供ならではのものといえる。

理科学習といいながら対象への科学的で分析的なアプローチの前に、子供たちが生き物に抱く友だちに対するような熱い思いをすくい取る視点を庄司先生は「ゲシュタルト(総和)的把握」と称したが、尾崎さんが指摘するように、すでに子供たちの中

に認識の萌芽が育っていることを発見したのは他ならぬ庄司先生だったとあらためて気づかせてくれる。

庄司先生追悼プロジェクト 進行状況

◆追悼文集編集

小田、植垣、向井、武田さんらを中心として進めている「庄司和晃追悼文集」は、6月に原稿最終締め切りを迎え、いよいよ編集・校正の段階に入っていくようです。成城学園で庄司先生に教わった方々からも原稿が寄せられ、成城学園、研究者の方々、大東文化大学関係、看護関係の方々、そして全面研のメンバーと庄司先生ゆかりの方々が大勢揃いました。また、小田さんからは例会で庄司先生の奥様の原稿が紹介され夫唱婦隨の思いを語ったその内容に心うたれました。発行は300部の予定だそうです。

◆庄司先生を偲ぶ会

先日四ッ谷で呼びかけ人の初会合が開かれました。参加者は、岡本(日本助産婦会会長)、小池(成城学園卒業生)、永野(ことわざ学会)、武田、向井、尾崎、小田、徳永です。このほか篠原さんも名を連ねています。

決まったことは以下の通りです。

日時：9月18日(日) 13:00

場所：成城学園(交渉中)

内容：ゆかりの方々のスピーチ、追悼集の紹介、庄司先生の思い出のアルバム…などが上がっています。

次回準備会：6月25日(土) 5時、
四ッ谷の喫茶ルノワール。皆さんアイデアを持ちよりぜひご参加を。

若い教師へのアプローチ

今こそ全面研の存在を

若い教師の勤務状況が今大変な状況になっています。いろいろ聞いてみるとこんなぼやきが聞こえてきます。

- ・業務が多忙
- ・保護者にクレーマーが増えている。
- ・教材研究ができない。(しない)
- ・模範にする先輩が少ない。

.....

仕事が多忙になったのは教育業務だけでなくほかも同じ状況と思われそうですが、肝心の授業がおろそかになる状況を招いているのはゆゆしきことです。

ここは一つ全面教育研究会の存在を華々しく喧伝したいところですが全面研も庄司先生亡き後、例会も尻すぼみ状態になりつつあります。

ホームページを含めて何とか若い先生達にアプローチする方法はないものでしょうか。皆さんぜひ良きアイデアをお寄せください。

【6月全面研のお知らせ】

日時：6月11日(土)

15:00~

工事のため遅らせませす

場所：成城学園大学棟3階控え室

内容：庄司先生追悼プロジェクトの報告

・検討

持ち込みレポート